第十二回 全国大会

昭和四十六年五月十二日（水）
於・比叡山国際観光ホテル

とにかく楽しいのである。御大高畑さんは遠足前夜の校長さんのように「人数は何程になったか、お天気は大丈夫だろうか……」と、たびたび電話で問い合わせやら指示を飛ばしてこられる。ひょっとするとご自身が首を長くしてこの日を待っておられたのではなかろうか。東京支部長の西川さんにいたっては「わしはバスに乗って行く、みなさんと一緒にすわる」といって奥さんともども席をしめられる。ご自分の車はカラのまま一行のあとからゆるゆる随行？哄笑をおさえることができない。それはさておき、遠方の会員のために集合を十一時としたのだが十時半にはほとんど顔が揃う。お江戸方は七つ（四時）立ならぬ相当早い便で西下されたのであろう。京都駅八条口には紫紺の旗ヨネマークの下に百八十名が構内せましとばかり集い合う。予定十分前、四台のバスがくる。実はこのバスについてちょっとしたハプニングがあった。前日になって急に近畿ツーリストから契約のバス（スタンダード）三台を修学旅行用に振り替えたいのでデラックスバスに変更してほしい。収容人員が小さいので四台差し向けると申し出てきた。当方はすでに予算を決定しているので料金の増額は困難である旨返事をすると、もちろん自社の都合であることとて最初の契約のままで結構という。あえて文句をいうところがない、漁夫の利というか怪我の功名というか幸先のよいことである。予定かっきり、四台のバスの列は堀川二条城の前を走り銀閣寺の下から北白川に出て、新緑の山道を縫い比叡山に向って快適なドライブをつづける。一年中で一番よい季節にしかも快晴とあってはこんな嬉しいことはない。十二時、会場比叡山観光ホテル到着。琵琶湖の大観は少し霞んで茫洋としているが、高山独特の清冽な空気が肌に感じられてこころよい。このホテルも辰巳会の盛況にびっくりしたのであろう、宴席が少々窮屈なぐらいで係員が「何しろ開館以来はじめての大勢様でして……」ときりきり舞をしている。今度の大会の一つのあらわれとして、ご婦人方の出席がたいへん多く準会員の未亡人方や奥さまご同伴がだんだん増加して誠になごやかな風景である。すでに顔なじみになられた婦人方も多く久かつを徐する言葉が交されている。感動的な場面が展開されている。九州支部長の松本通氏や木村七郎氏が沢村さんの奥さんを探しておられるのでお引合せすると、故人の余慶を称える叮重なご挨拶があり、橋本隆正氏薫未亡人には初対面の人も交えてたくさんの人たちが故人の面影を偲んで言葉を交えられる。ジーンとするような場面である。まもなく大幡幹事が開会を宣して挨拶をのべられる。会合には欠くことができない小野さんの姿が見えないのが淋しいが、いまはすっかり元通りに快復されてきょうは御雄姿に接し得ると期待したのが、もう少しのご自重とあっては不本意も止む得ない。大幡さんは喜色を満面にあらわしてこの盛会に深甚な謝意をよせられ、今後の会の計画活動などを要約して説明せられる。吉例の高畑会長は前日から到来の余勢をかって長寿の願望と雄大な世界観の片鱗を披歴され、老後の盟約のいつまでもあるべきを語られる。ちなみに高畑さんはことし四月を以って太陽鉱工の社長から引かれて会長に就任、新会長には鈴木治雄氏が就任されてバトンを引き継がれた、その就任披露パーティーが四月五日、オリエンタルホテルで開催され、財政界の名士多数参列、花隈の名妓が酒間を斡旋、などやかにも豪華な催しが開かれた。筆者も小倉幹事と陪食の栄に浴し、太陽鉱工の新陣容に限りなく希望と慶祝を表するのであった。さて、西川さんはやおら立ち上りマイクも物かわ元気一杯の大声で、日商岩井の商勢を中心にエコノミックアニマルのあり方について言及、ほとばしるばかりの闘志と経論を語り、ついでに城山三郎著すところの「猛烈社員を挑す」という本の紹介をされる。高遠な思想とあふれるばかりの稚気が同居しているようで奇妙なユーモアが満場をやわらげる、小倉幹事が行き届いた内容の会務報告を名調子で説明、その話題のまあいにフルコースの皿が動く。全国大会の名物、高石氏が木戸孝允・作「山堂夜坐亡友を思ふ」の銘吟、佐野氏の美声歌謡、藤内の艶笑ばなし、下元氏の江戸前小唄、島内氏の音曲小唄な

どいずれおとらぬ杵柄が時の足らぬをなげかせつつ、楽しい食事のひとときがままたく間に過ぎてしまう。恒例によって会員は湖を見下す庭に下り立って記念撮影をする。陽光は惜しみなく頭上に輝いて早初夏の薫風が快い涼風を運んでくれる。これより行程を野外に移して奥比叡から琵琶湖の一画を探訪すべく再びバスの一団が動く、さわやかな風と山気をついてまず延暦寺根本中堂に着く。ここはつい一昨日五月十日まで、開祖伝教大師の一一五〇年遠忌が営まれた直後のこととて、きょうもなおその余韻がそのまま立ちこめていて参拝の人波が引きも切らない。大講堂、根本中堂に仏法創建の大偉業を偲びつつ車の列は新しくできた奥比叡ドライブウェイーを走る。四月十八日に落慶法営の行なわれた横川中堂や西塔釈迦堂は割愛して、右に湖を鳥瞰しながら一路堅田を通りビワ湖大橋にさしかかった。土木工学の粋を集めて架けられた日本一の大橋の上から眺めると、湖面は油を流したようなおだやかさだ。右手には墨絵を見るような浮御堂が岬の突端にくっきりと浮び出て見える。前方の海津大崎、竹生島ははるか霞の彼方にそれとおぼしく望まれる。名にし負う雄大な湖水の景観に魂をゆだねつつ快適なドライブはまもなく瀬田の唐橋に到着。瀬田川、南郷洗堰とつづく一帯の水郷を存分に観賞しつつ石山寺にいたる。秋の月で八景のトップを飾るこのお寺は、いまサツキの真っ盛りで樹令数百年を誇る巨木が全山を包むように真紅の帳りを展げている。紫式部が源氏物語を執筆したゆかりの書院を見、月見のあとから秋を偲び再びビワ湖の遠景を望んでちょうど五時下山する。ことしの全国大会も終わった。京都駅へ向う車中ではきょうの一日を語り、また逢うつぎなる日を約し、六時名残り惜しくも京都駅に袂を分つ。

思うにわが会も年々幾千かの知友を失い、何ほどかの衰退をこばむことができないにもかかわらず会合の盛況は回を追う毎に盛んとなり、親睦につらなる事業は常に活況を呈して大方盟朋の讃意が集中する。それはとりも直さずわれわれは血のつながりであることの自意識に根ざすものであると信ずる。一日を語り一食をともにし強烈なる郷愁を喚起して明日に生きる辰巳会に永遠の栄あれかしと念ずる。

（黄）

〔会務報告〕(二)

小倉五郎

昭和四十六年五月十二日
於・京都比叡山国際観光ホテル

会務報告をいたします。まず第一に先刻すでにご承知のこととは存じますが、昨年十月十四日に名古屋における大会以後の叙勲拝受者の方々を申しあげます。

勲二等瑞宝章　西川　政一
勲三等旭日中綬章　花井　嘉夫
勲五等双光旭日章　山本　錬造
藍綬褒章　五十嵐　集

なお、この他に今は亡き浅井長平さんにも畏くも、従三位、勲一等瑞宝章が追叙されました。誠に有難き極みでありまして、ひとり浅田家のみならずわれわれとしても、また名誉これに過ぎるものはないと存ずる次第であります。

次に本年喜寿に当られる方、明治二十八年生まれのかたがたでありますが、二十三名あります。このかたがたにはまん中に高畑会長の大きく寿とご揮毫のある朱塗りの大杯を昨年末にそれぞれお送りいたしましたので、ことしのお正月はご家族打揃われた席上、この大杯になみなみと長寿の甘酒を注がれ廻し飲みなどなされたことと拝察申しあげます。

続いて、ことし米寿を迎えられる、明治十七年生まれの、

渡辺庄作4／7　渡瀬正磨8／3
野田繁彦5／13　田子富彦1／2

の四名のかたがたには銀盃をお誕生日までに必着するよう発送手配完了しておりますので、すでにお受取りいただいた方もあると存じます。喜寿のかたがたに米寿のかたがた、ほんとうにおめでとう存じます。心からお祝いを申しあげます。そして、われわれもまた、跡に続くべく頑張る所存でございますが、みなさまがたにはわけてこの上ともご自愛専一に余生をお楽しみいただきますよう、切にお願いいたします。

次に金子翁遺芳集のことでありますが、資料の原稿なども会員のみなさんがたのご協力によりまして、ほとんど整理完了いたしまして目下、目次の編成中でありまして近く同書の購入申込書を発送する段階にまでなっていますので、お手許に到着の上はぜひ折返しお申し込みのほどお待ちいたしております。

尚、大会毎に申しあげております通り本会は会の性質上、一般会員からは会費を徴集いたしておりません。今後もこの方針は変えないつもりです。ご承知の通り本会発足以来長らく法人四社のご支援によって運営されていたのでありますが、その後、その範囲が拡大され法人・個人の別なく「たつみ会」に対し賛助会員として特別のご支援を賜わっているのでありますが、もれうけたまわるところに依りますと「たつみ会」の賛助会員になることに対し、何か面映いような思いをされて未だ躊躇されていられる向がかなりあるように伺いますが、どうかそのようなご遠慮は一切払拭され、賛助についてどしどし幹事までお申し出のほど切にお願い申しあげます。

次に前回名古屋大会のときご報告申しあげました亡くなられました十八名のかたがたにつきましては、さる四日、本部幹事打揃い六甲祥竜寺において菅禅師の懇篤なる読経のあと、たつみ会供養塔に合祀いたしました。

なお、その後亡くなられた方、名古屋以前に死亡されたかたがたをご報告申しあげます。

哀悼名簿

享年
四五・三・二四　田辺　勘一(72)
九・二四　永田　豊
十・　山中宇三郎(79)
十一・一　太田　武城(73)